

# 開拓時代を支えた馬たち

北海道に、本州から馬が入ってきたのは江戸中期。明治期になると馬は開拓の担い手となり、馬産地・十勝の礎が築かれます。

## 北海道和種「ドサンコ」の誕生

### 厳寒に耐えた馬たち

ばんえい競馬の故郷であり国内有数の馬産地として知られる北海道ですが、意外なことに、この地にもともと馬はいませんでした。アイヌ語でも馬は「ウンマ」と呼ばれ、アイヌ固有の言葉ではなく和人から伝えられたものであることが分かります。

北海道と馬との関わりは江戸時代中期。「蝦夷地」と呼ばれていたこの地に、松前藩の藩士や本州からの出稼ぎ人、商人などが南部馬を連れてきたのが始まりです。冬が近づき、本州に帰る人々は馬を野に放ちました。すると驚いたことに、馬たちは極寒と粗食に耐え抜き、生き延びて春を迎えたのです。

北海道の厳しい自然に適応し

た馬たちは、半野生状態で飼育さ

れるようになりました。夏から秋にかけては自由に野の草をはみ、冬になって原野が雪に閉ざされると、掘り起こしたミヤコザサや浜辺に打ち寄せられた海藻などを拾い食いして命をつなぎます。松前藩の藩士たちは、この時を待って馬を捕らえ、秋の間に用意した干草を与えて人に馴らしたそうです。

こうして自然繁殖した馬が、北海道和種馬「ドサンコ」の始まりでした。東北生まれの南部馬は、今では絶滅してしまいましたが、古来、名馬と謳われ、大きく立派な体格が特徴でした。それに対し、ドサンコは北海道の自然環境に合わせ、体格こそ大きくなかったものの、丈夫で頑健な体質を得たのです。

### 十勝沿岸部に馬来たる

江戸幕府による蝦夷地進出は、道南の渡島地方から次第に沿岸部全域へと広がっていきました。十勝に初めて馬がもたらされたのは寛永十一年（一七九九年）のこと。東蝦夷が幕府直轄となり、交通と物資輸送のため、六十頭ほどの南部馬が沿岸部の広尾と大津に配備されました。これらの馬が自然繁殖する一方、交通網の拡充に伴って新たに導入された馬もあり、その数は安政五年（一八五八年）には二一五頭にも達したと言われています。

やがて本格的な開拓時代が始まります。明治二年（一八六九年）、蝦夷地は北海道と名を改め、現在の十勝管内域に当たる地に十勝国が創設されました。それとともに配備されていた馬たちは、本州からの定住者やアイヌの人々に安価で払い下げられました。十勝において民間人が馬を持つようになったのは、これが最初とされています。

### 西洋から伝わった馬耕

北海道の原野開拓は、想像を絶する困難を伴いました。木を切り倒しても地中に深く張った太い根

が残り、土をならすのも容易ではありません。この根を抜く作業「抜根」を担ったのが、頑強なドサンコたちでした。体高が低く、がっしりとしたドサンコは、背に荷物をくくりつけて運ぶ「駄載」にも優れていました。開墾が軌道に乗ると、馬たちの仕事はさらに増えていきます。

明治政府は、北海道に大規模農業を根付かせるべく外国人指導者を招き、本州に先駆けて西洋式の農具を導入しました。プラウ（すき）、ハロー（碎土機）、カルチベータ（中耕除草機）といった最新の農機具をひくのは馬たちの役目です。

した。開拓民は外国人指導者から、馬を操る技術も学びました。ひき馬を自在に操るこの技こそが、ばんえい競馬に引き継がれていったのです。



馬の資料館に展示されているプラウ。実物大の模型で当時の馬を使った農作業の様子を知ることができる。



十勝の農村部で日常的に見られた農耕馬のいる光景。大正16年。（写真／馬の資料館）

## この物語の舞台 十勝マップ



### 十勝と馬の略年表

寛永11年 (1799年)	現在の広尾と大津に南部馬が配備される。
明治2年 (1869年)	十勝国創設。配備された馬が民間に払い下げられる。
明治16年 (1883年)	依田勉三率いる「晩成社」が現在の帯広に入植。
明治19年 (1886年)	晩成社が本格的に馬耕を始める。
明治39年 (1906年)	第一次馬政計画始まる。
明治43年 (1910年)	仙美里地区に軍馬補充部釧路支部足寄太出張所開設。十勝種馬牧場開設。フランスからイレネーを導入。
大正14年 (1925年)	仙美里の軍馬補充部、釧路支部から分離して十勝支部に。
昭和5年 (1930年)	十勝公会堂前にイレネーの初代銅像建立。
昭和20年 (1945年)	北海道空襲。第二次世界大戦終結。
昭和30年 (1955年)	十勝の馬の総数約65,000頭に。
昭和35年 (1960年)	この頃からトラクターが普及し、馬は減少。
昭和39年 (1964年)	帯広競馬場にイレネーの銅像再建。

馬耕に励んだ鈴木銃太郎

十勝の開拓は官主導の屯田兵ではなく、本州から渡った民間の開拓移民によって進められました。現在の静岡県松崎町で依田勉三、鈴木銃太郎、渡辺勝らが「晩成社」を結成。明治十六年（一八八三年）、一行二十七名が下帯広村（当時）に入植します。これが、十勝で最初に町となる「帯広」の始まりでした。

晩成社の人々が開墾を始めた土地は巨木が多く、長らく手起こし作業が続きました。しかし耕地が広がるにつれ、畜力による耕作の試みが始まります。明治十八年九月、晩成社に初めて馬六頭がやってきました。鈴木銃太郎の日記によると、早速、馬たちに逃げられてしまい、馬集めの際に落馬してあばら骨を痛めたとあります。しかし、じきに銃太郎は見事に馬を乗りこなすようになりました。晩成社は馬たちの共同牧場をつくり、明治十九年、本格的な馬耕を始めます。中でも最も熱心に馬

耕に取り組んだのが銃太郎でした。晩成社と別れてシブサラ（現・芽室町西土狩）へ移住して以降、本格的な馬耕を開始。二頭びき、三頭びきプラウ、カルチベータなどを利用した耕作に励み、新規の開拓民への技術指導にも当たりました。

明治三十年代になると銃太郎は美生にて本格的な馬の牧場を営み、種馬の導入と品種改良にも励みました。この牧場は上伏古の息子に受け継がれ、その後、大型の農耕馬を生み出すに至りました。

渡辺勝、英国青年に馬を貸す

晩成社のもう一人の中心人物、渡辺勝と馬について、こんな面白い話も伝わっています。明治二十三年八月、勝の住む草葺きの掘っ立て小屋に、北海道旅行中のイギリス人青年ランダーが訪ねて来ました。英語の堪能な渡辺夫婦の歓待を受け、ランダーは二晩を楽しく過ごし、一枚の油絵を残して大津へと向かいました。この時

ランダーは、二頭の馬を勝から借り受けています。

大津に到着したランダーは、宿泊した宿の主人に勝の馬を託します。ところがこの主人、いささか評判の悪い人物で馬はいっこうに戻りません。当時は馬一頭が三十円の時代、馬二頭といえば、ひと財産です。

ランダーは勝に幾度も手紙を書

き、あのような人物に馬を預けてしまった自らの軽率を詫言います。

しかし勝はランダーを責めることなく、親愛の情に溢れた返事を書くのでした。結局、宿の主人が馬を返すことはありませんでしたが、馬は自力で、勝ではなくその前の飼い主の元へ戻ったという話です。

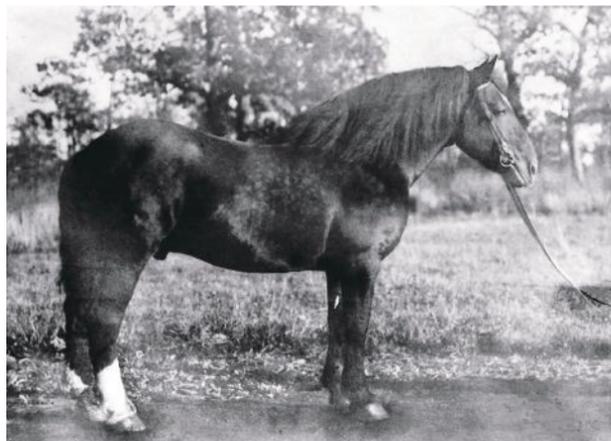
ばん馬の父・イレネー

「重種馬の十勝」の幕開け

北海道で農耕が軌道に乗り始めると、小柄なドサンコよりも、荷をひく力に優れた大きな馬が求められるようになりました。政府の奨励によって海外からトロッター種、ペルシユロン種などが輸入され、ドサンコとの交配によって大型馬が誕生するようになります。こうした交配馬は農用トロッ

ター、略して「農トロ」と呼ばれ、ドサンコに代わる農耕馬として広く使われるようになりました。明治四十三年、馬の改良と繁殖を目的として、現在の音更町駒場に十勝種馬牧場（現・独立行政法人家畜改良センター十勝牧場）が開設され、フランスから三頭のペルシユロンがもたらされます。そのうちの二頭が、その後の十勝の馬産に大きく貢献することになる「イレネー」でした。

体重一九七貫（約七四〇キロ）、現在のばん馬に比べると小柄な方ですが、当時はあまりの大きさに、果たして日本の馬に種つけできるものかと心配する声が上がったほどでした。イレネーは十八年の間に一〇七四頭の牝馬に種つけし、五七九頭の産駒※を残した上、その直系の子孫は、さらに多くの優良馬を生み出しました。このイレネーの功績が、今日のばん馬生産につながる「重種馬の十勝」の地位を決定付けたのです。



フランスからやってきたイレネー。(写真/ (独) 家畜改良センター十勝牧場)

※産駒（さんく）/競馬用語で、ある父馬または母馬から生まれた馬のこと。



上伏古牧場で種牡馬にまたがる鈴木銃太郎の4男・信夫氏。(田所武編著『鈴木銃太郎日記』より転載)

銅像になったイレネー

イレネーは怪我のため、20歳で命を落とします。その2年後の昭和5年8月、十勝畜産組合によって十勝公会堂前（現・帯広市西5条南8丁目）にイレネーの銅像が建立されました。全国でも種馬の像は例がなく、除幕式には来賓800人、観衆2,000人余りが詰めかけました。この像は、第2次世界大戦中の昭和18年、金属供出によって接収されてしまいましたが、昭和39年に2代目の像が誕生。それが、現在も帯広競馬場入口に立つイレネー像です。また、昭和44年には、その年デビューした新馬が競う重賞レース「イレネー記念」が創設され、毎年3月に開催されています。イレネーの名は今尚、十勝の地に深く刻み込まれ、人々の記憶の中に息付いているのです。



帯広競馬場入口に立つ現在のイレネー像。彫刻家・加藤顕清（かとうけんせい）作。